

磨けば光る地域の伝統文化



取材に行ってきたばい

時代の変化により、地域に受け継がれる伝統を守るハードルは高くなった。そんな中、江戸時代から200年以上脈々と伝統を受け継ぐ畦町宿の秘策に迫った。

畦町宿を守り続ける

福津市畦町宿は、宗像市の唐津街道赤間宿と古賀市の青柳宿の間に宿場町として設けられたのがその始まり。宿場町内には壊れかけていた郡屋¹が残されており、この郡屋を地域住民の手で守っていくことを目的に、平成24年唐津街道畦町宿保存会が発足した。保存会のメンバーで郡家の再生に取り掛かろうとするものの、その再建には多額の費用が必要になることがわかる。再建費を工面することは難しかったため、自分たちの身の丈に合わせてできることをしようと、神社のほりにある池をみんなできれいにした。すると、それを地域の人たちが大いに喜んでくれた。「自分たちができることを行ったのですが、こんなにみんなが喜ぶことに驚きました。郡屋の再建はできないけど、自分たちが無理なくできることをしようということになりました」と保存会で事務局長を務める岩熊寛さんは語る。

しなやかに伝統文化を継承する

その畦町で最も長く継承されているのが火の用心を告げる「火番の太鼓」である。これは200年以上前から続く地域の伝統行事で、毎年11月～1月までのおよそ3か月の間、住民の持ち回りで行われる。宿場町内の約600メートルの街道筋囲を、夜

中の10時から2時まで計5回太鼓を叩くのが古からの習わしだ。この取り組みの始まりは、江戸時代まで遡る。地理的な影響から何度か火災に見舞われていたそうだが、1792年に起きた大火事で宿場のほとんどの家々が全焼し、残ったのはわずか7軒だったとの記録がある。同じような被害を未然に防ごうと住民が始めたのが火番の太鼓である。太鼓を合図に各家が火の始末の点検を習慣化した。しかし、時代の変化に伴いその伝統



火番の太鼓を持って夜回りする畦町住民の春岡さん



ちょうど



火番の太鼓。叩くとトーンという音が辺りに響く



イベントではダブなどの夕食を参加者で囲む

が各家庭の負担となっていた。この伝統を続けていくべきか。そこで住民が集まり火番を続けるかどうかを協議した。「男性からは伝統を守るべきだという声が多く出たのですが、家庭を守る女性に負担が偏っていたこともあり、女性からは続けなくていいのではという声もありました」と岩熊さん。その結果、昭和の末頃からは太鼓を叩く回数を1回に減らし伝統を継続することになった。また、火番の持ち回りの回数は各家庭で年2回までと上限が設けられた。高齢者だけの世帯も増え参加が難しい家庭もあるため、現在は30軒ほどで持ち回る。昔から受け継がれてきた伝統をそのままでもなく、できる範囲でしなやかに継承することが大事であることを畦町宿は教えてくれる。

磨けば光る伝統文化

伝統を残すようにしたのはいいものの地域の住民の負担も残っていた。ところがある会で、負担と思われていた火番の伝統を面白くと言われた。「住んでいる人たちからすると当たり前のことが外部の人からすると魅力的に見えることを感じました」と岩熊さん。その声を受けて、一般人が体験できるプログラムにしてみようということになり、福津市の観光体験プログラム「福津暮らしの旅」に掲載されるようになった。プログラムの実施は今年で4年目。これまで多くの人が火

プロフィール 岩熊 寛さん 72歳

福津市畦町出身。国語の教師だったが、退職後に実家の古民家を活用して、ぎやらしい畦を開店。妻と娘の家族3人で運営を始めてから今年で10年が経過した。毎週木・土・日曜日がぎやらしい畦の営業日で、陶器やトンボ玉、娘さん手作りのケーキ等の販売、月替わりの個展を開催する。



番の太鼓に参加した。参加者からは「畦町の住民の一員となった気分になれるのが大きな魅力」などの声があがる。12月9日には福津暮らしの旅で「畦町宿で火番体験とダブ²作り」が開催される。

*1 郡家とは、郡内の村役人の集会所のことで主要な宿場に置かれていた。参勤交代に関わる打ち合わせや藩からの重要な伝達があったときには、ここに郡奉行や大庄屋、庄屋などが集まって会議を開いていたと言われる。
*2 ダブとは、宗像周辺に昔から伝わる郷土料理。「汁がだぶだぶある」ということからそう呼ばれるようになったと言われている。



地域の防犯団体とも連携して活動を行っている

すごかー！



タチバナくん、今回の取材も勉強になりましたか？

勉強になりましたばい！



福津暮らしの旅パンフレット



ぎやらしい畦の前にある自転車とカエル



ぎやらしい畦の外観



NPOに生息している人ってどんな人？
ありのまま、そのままの「人」に
焦点を当てるコーナーです。

Profile ときやすりえ 時安 里江さん

パトラン宗像チーム 代表
最近好きなのはマラニック(マラソン+ピクニック)。
走った後の温泉とビールはたまりません！



「年甲斐もなく…っていわれるのが究極の褒め言葉ですね」

パトランは地域をパトロールしながらランニングするという、新しいスタイルの防犯活動。今や全国に拠点を広げるパトランの発祥地であるここ宗像で、チームの代表を務めるのが時安さんだ。本職は看護師。48歳とは思えないその容姿から、人は彼女のことを「美魔女」と呼ぶ。そのアクティブさと若さがパトランの活動とどう関わっているのか取材した。

今はフルマラソン、ウルトラマラソンまで走りきる彼女だが、もともとは運動音痴。走り始めたのも40歳すぎからという。「歳をとったせいもあるのか、いろいろな持久力がついてきたみたいで。逆に若かったら走れてないですよ」。子ども手を離れ始め、自分の中で目標にしていたフルマラソンも完走し、ストイックに走るよりも楽しんで走ろうと思っていた頃、パトラン開催のランニングセミナーに参加した。それがパトランとの出会いだった。「一緒に走りましょうよ」と声をかけられ、気楽に活動に参加するようになった。

※ウルトラマラソン…42.195kmを越える道のりを走るマラソンのこと

もともと様々なレースに参加して全国にランナー友達いた彼女。「宗像でパトランって活動があつてね」とSNSで発信すると、彼女の楽しそうな様子は多くの友人ランナーの注目を集め、活動はまたたく間に全国に広がった。「パトラン

の広がりには時安さんがいたからこそ」。あっという間に宗像チームの代表に任命された。

「パトラン発祥の地として全国のお手本にならなければというプレッシャーはありますが、それまで会うことのなかった地域の人たちと出会いがあり、今は毎日が充実しています。活動でのコミュニケーションが仕事に活かせたり、仲間との交流自体がエネルギー充電になっていたりして、仕事との相乗効果を感じています」と、活動に参加してからの変化をこう振り返った。

時安さんにとってパトランとは？「パトランで走るのはいすたイルの延長ですね。何か人の役に立ちたいとは思っていたけど、不思議とボランティアをやろうと思って走っているわけではないんですよ。今は自分が楽しく走っていることで周りに元気が伝播していることが嬉しいです」。本当に楽しそうに話す時安さんを見て、年齢を重ねることはマイナスなこと

ではなく、逆に魅力的な面が増えることを教えてもらった。私もタイミングが来たら走り始めよう。取材/執行 沙恵



はなく、逆に魅力的な面が増えることを教えてもらった。私もタイミングが来たら走り始めよう。取材/執行 沙恵

LOCAL × DESIGN ACADEMY 2017



全3回開催しました！

「地方での新しい仕事のつくり方」を考えるLDA2017、今年は佐賀や大分からの参加者も含め14人が集まりました。宗像で仕事を生み出している30代ゲストの等身大の経験を共有し、刺激たっぷりの3日間となりました。「仲間づくりの大切さに気づくことができました。やっていることは違っても、目指す方向性が同じ人たちと繋がっていくことで自分や相手の可能性を広げているのだと思います」、「自分の目指している場所のはるか先を突き進んでいる皆さんの話を聞いて視野が広がり、可能性も広がり、ワクワク心が爆発しました！」などの声をいただきました。
※活動レポートはむなかつ市民フォーラムのサイトをご覧ください。